

# 釣れ釣れなるままに

2014年思い出の釣行記 PART. 4

## 菱申武芸釣 鹿島釣狂

### 岩見沢釣遊会第1回大会

平成二十六年第一回大会が四月二十日（日）に須築港～瀬棚港で開催された。四月に入ってからうららかな日が続いていたが、海水温がまだまだ低い状況で推移し、他の釣り会の釣果も芳しくなく、優勝者が一の五で五百点、二の十でも千点を超えていないのが現状だ。名人級を揃えた会がこの区間より更に南で開催されたのだが、三十人集まって三匹で優勝したとのことである。二魚種揃えられれば入賞という低迷した大会だった。かの有名釣り場である鮪ノ岬に入った強者達も皆ボンズを食らったらしい。今回お客様として乗っていただいた荻野氏は一本の大物アブラコで身長優勝を果たしたということだ。

私は三年連続となる藻岩岬に入った。初めて入ったときは竜巻に遭遇しながらも優勝を果たした。二回目は数こそ釣れたのだが大物がいなくて下位の成績だった。今回は是非大物を仕留めたいものだ。

波は穏やかで風もなく気分は上々だ。磯周りを大ゾイがギョロリとした目で見据えながら泳いでいる気配が漂う。根魚を狙ってゴロネット仕掛を近投するが、音沙汰がない。仕掛を上げると、ゴロが打ち込む前の姿のままだ。生きのよいゴロの上に海水が非常に冷たいので溶け出さないのだ。ゴロの皮をビリビリに引き裂いて打ち込んで、破けた状態でそのまま戻ってくる。この冷たい海水を想定して家で十分に溶かしてから持ち込むべきだったのだ。

竿先がクンクンとお辞儀した。しかし、それだけでまた止まってしまった。活性が上がらずエサを銜え込んでも、またすぐに離してしまう状態が続いた。何とか小アブラコと小ゾイを手にすることができた時には周囲が既に明るくなってしまっていた。

四時間ほど繰り返し打ち込んでもたった二匹の獲物しか得られていないのだ。昨年の釣りで親鱗会の小西氏からこの付近の状況をつぶさに教えていただいていたこともあり、移動することにした。昨年、小樽名人会の鶴巻氏が入っていた小山のような岩陰に釣り人がいたので、様子を伺ったがまだ二人ともボンズだった。周辺の仲間も全く釣りものがないらしい。

昨年小西氏が入っていた入り江のような所で竿を出した。磯周りを見ると海藻が付いて

いない。ワカメも昆布も海水が冷たくて育ちきっていない風なのだ。やはり、ここでも全くアタリが出なかった。去年の小西氏はアブラコを大釣りしていたはずなのだが・・・。  
反対側の入り江に移動する。やはり状況は同じだ。とうとう小アブラコと小ゾイの釣果のみで引き上げることとなってしまった。



移動した入り江でも全くアタリは出ない

### 初参加初優勝

優勝者は、初参加の森光信氏であった。普段は防波堤や磯で、カレイをメインとした釣行だが、去年の岩見沢釣遊会五十周年記念行事の新聞記事を目にした森氏が、是非大会の雰囲気味わってみたいものだと、事務局長の私に連絡をくれて今回の参加となったのである。森氏からは何度か電話が来た。参加するかどうか思い悩んでいるらしく、釣り場は？仕掛けは？エサは？道具は？と尋ねてくる。私が釣り会に入った時は、誰も知った人がいないという中で、緊張感があった。彼もそれは同じだろう。当時の自分と森氏を重ね合わせながら丁寧に受け答えしていると、最終的には連れて行って欲しいとの電話が入ったのだ。

バスの中で道具立てを見せていただくと、スピンパワーの並継に二号ナイロンの道糸とテーパラインの組み合わせといういわゆるバリバリの遠投派だ。リールもマグシールドを搭載したもので高級品らしく、持たせていただいたが非常に軽い。品名も言っていたのだが、自分には無縁のものと忘れてしまった。磯場はあまり経験がないので、前野会長に案内されて瀬棚港に入り、46cmを頭とするアブラコにクロガシラ、アカハラ、ホッケ、

カンカイと五目釣りしてきたのだ。釣り会の雰囲気と大物の感触を楽しんだ森氏は、今後も是非仲間を連れて参加したいと話してくれた。

案内役に回った前野氏は、そのご利益を賜って44cmのアカハラを仕留めて身長優勝、少しお疲れ気味で朝方から竿を出し始めた堀内氏も準優勝、最内川でアカハラを狙った嵐氏、佐々木清氏が三位、四位と瀬棚組が圧勝した。根物を狙った磯組は惨敗の結果だった。

私は納竿期に釣り新聞で紹介された仕掛けを作って持参した。自分の思いは他にあるのだが、まずは細部にいたるまで忠実に再現してみた。いつもは製作過程で自分流に改造してしまって原作者の意図を汲み取れていないのではないかという思いがあったからである。使ったこともない小道具等もあるので釣具店で買い求めた。出来上がってみると、原作者には私とは別のところに思いがあるらしいことは分かるのだが、やはり満足のいくものは少なかった。しかし、実際に使ってみないとその良さは分からないのではないかと、釣り場に持ち込んでみた。だが、残念なことに今回はアタリも少なく、その検証は次回に持ち越すことになってしまった。

五月の第二回大会は、今年から企画された「とんとん会」との合同大会である。会員数の減少に悩まされている岩見沢の二つの釣り会が一同に会して楽しい交流が出来ればと願っている。今回、私は<sup>ほうこう</sup>彷徨で疲れ切ってしまい、入賞者の大物写真を撮ることを失念してしまった。次回は、海水温が上がった寿都・島牧の磯で、仲間が釣り上げたアブラコやホッケ、カジカ、そしてソイやハチガラの大物を拝ませてもらいたいものである。もちろん私自身の竿を揺らした大物も……。



総合優勝の森氏

## 苦小牧西港旧菱中造船所前

4月27日（日）から休暇を挟んで29日（火）昭和の日と三連休になった。どこへ釣りに行こうか。低迷していたホッケもようやく島牧村栄浜で釣れ出したと伝えられた。弁慶岬周辺に足を伸ばしてみるのもいいだろう。しかし、あいにく名寄にいる孫がロタウイルスに罹って、娘から応援を要請された。娘が育休明けで職場に復帰し、一歳を過ぎたばかりの孫が保育所通いをすることになったのだ。仕事も滞るようになって休日出勤してでも片付けてしまいたいらしい。二十七日、急遽、名寄で子守することとなってしまった。

しかし、まだ二日間休みが残っている。二十八日、島牧方面は無理として、近間の苦小牧港なら大型クロガシラが期待できると出掛けることにした。道具を準備して昼食、夕食、朝食用の弁当を買い込み、釣具店に立ち寄ってイソメを物色していると携帯が鳴った。女房からのお迎えの依頼と昼食にラーメンでも食べに行きましょうというお誘いである。昼弁当を買い込んだからと断って一路苦小牧港へと出発した。

座布団クロガシラでは室蘭港西埠頭、L字岸壁と双壁をなす旧菱中造船所前では、昨年、アナゴ釣りをした経験があるので、そちらへと向かってみた。道中、晴海埠頭に立ち寄ってみた。あいにくの強風で埠頭に山積みされた石炭の粉が舞飛び、煙幕がかかっているように見える。ニシンを狙って自動しゃくり機で竿を上下させていた釣り人の顔を見ると誰もが煤けている。そして、鼻の穴の周りが石炭の粉を吸って黒ずんでいた。背中から吹いてくる風で遠投ができそうだが、石炭塗れはご免被りたい。南埠頭は相変わらず外国船が入港中ということで立入禁止になって、門番がガードを固めていた。

## 菱中武芸帳

旧菱中造船所前の「くの字岸壁」（勝手に自分で名前を付けた）では、精鋭四人が竿を出していた。丁度四個のカゴメ野菜ジュース缶を持ってきていたので、それを差し出しながら状況を確認した。私は缶ビールをプシュッとやる。ここも例年より遅れているが、少しずつ上向き加減になってきたらしい。とびつきり人の良さそうな御仁〔服部半蔵〕にこの釣り場のことを伺った。ここでのルールを守ってくれれば誰が釣りをしても拒むものではないと次のような話をしてくれた。

道糸はナイロン二～三号、錘は二十七、三十号で統一している。仕掛けを投げ入れたら、道糸の方向に沿って竿を置き、そこに他人の竿があったら順々に移動させる。ただし、竿は十万以上もする高価なものが多いので傷つけないように最善の注意をする。魚の取り込み時には沢山の竿の下に潜り込んで他人の道糸に絡まないようにしなければならない。基本は魚を掛けた釣り人がするのだが、その作業がテトラの上で危険を伴うので仲間は竿を持って道糸のずれを修正するなどして協力を惜しまない。もちろんタモ入れは他の人間がする。まあ、こんなところだろうか。

それを聞いてしまっちは、みんなの竿の中に自分の竿を混ぜて置くことはできなかった。

そして、ここなら迷惑をかけることも無かろうと、空いていた丸太ん棒の切れ込みの端っ  
こで竿を出し、皆とは違う方向に仕掛けを振り込んだ。しかし、誰にもアタリが出ないま  
ま時間だけが経過していった。

先程、釣り場の決まり事などを親切に教えていただいた [半蔵] が、釣りものもないの  
で引き上げると言って港内に吊してあったフラシをあげた。それに40cmほどのクロガシ  
ラが一枚収まっていた。少し希望が見えた。



半蔵は、ここでの幼児クラスだと言いながらも満面の笑みで応えてくれた

他の釣り人も引き上げて、最後に女性釣り師 [くのー] と私の二人きりになった。[くの  
ー] の大物釣りの話を伺っている最中に、話だけでは伝えきれないと思ったのか、おもむ  
ろに車からアルバムを持ち出してきた。そのアルバムにはここ最近の大物とその獲物をぶ  
ら下げた [くのー] の得意満面の姿が写し出されていた。[くのー] が大物クロガシラを手  
にした写真に見とれていると、それは、「北海道のつり」が主催する「二〇〇五年釣り人ラ  
ンキングBEST-100」の五位にランクインした57.0cmのクロガシラだと打ち明け  
てくれた。その写真群の中には日付が十一月、十二月に撮影した大物も含まれていた。

先を捲っていくと、今度はビール瓶ほどもある太いアナゴを抱えた [くのー] が写って  
いた。それは83cmもあるアナゴなのだが、足元にはその他の50cm～80cmほどのアナ  
ゴが十本ほど転がっていた。

そして、最後のページには、苫小牧市から表彰された時の新聞記事の切り抜きが挟まっていた。海に落ちた女性を仲間と共に海中から助け上げたというものだ。この記事については多くを語ろうとしなかったが、アルバムを持ち歩く理由には自身の海難事故への戒めを秘めているのだと思われた。最後に、[くのー]の雌姿（シシといっても獅子ではない。雄姿じゃないことは確かだ）を撮らせてくれないかと頼み込んだが、姿を隠さねばならない身の上なのでと固辞された。



閑散とした釣り場で一人竿を出す

その[くのー]も引き上げたので、釣り人は私一人となってしまった。周りに迷惑をかける事も無いので竿1本増やしてコマセロケットカゴを付けて振り込んだ。しかし、どの竿も強風で揺れるだけで、魚からの信号は全くなかった。暗くなったら少しは期待が持てるのかなと思いつつも続けていたが、侘しくなって帰りたくもなってきた。明日は昭和の日だ。予報では風も凪いで釣り日和になるはずだ。ここを根城（砦）にするツワモノどもがドットと繰り出して来るだろう。この釣り場のルールに則りながら、大物クロガシラのお祭り騒ぎを見学するのも良いのではないかと、竿を出したまま車の中に潜り込んだ。

### 巖流島の戦い

早朝四時、そのツワモノたちが一人、二人、また一人と集まってきた。何やら見慣れぬ新参者が三本の竿を出している様を横にして、怪訝な様子で準備をし始めた。そして、白

いものが混じった髪を後ろに束ねた野武士の風格を漂わせる年長者〔宮本武蔵〕が「そこに出してある怪しい竿に触るなよ。何かあったら大変だからな」と若い釣り師〔猿飛佐助〕に諭している。私は、一本の竿を引き上げた。〔佐助〕は、スピンパワーの竿先を更に飛距離が出るようにと特注したらしく、ビシッ、ビシッと力強く振って具合を確かめている。そして、錘を付けて漁港内に軽く振り込みながら、竿先の調子を確認している。リールも今年出たばかりのダイワの「シーボーグ」を新調したのでその調子も探ってみるらしい。

〔武蔵〕は、私が出している2本の竿の道糸の方向を入念に見定めてから、スパッと竿を振りぬいた。それはあたかも私の道糸の20cm左方向に向けて仕掛けを投げ入れた風だった。確かに道糸を張ると私の道糸と平行になった。二本目もその左20cmでまたもや平行である。距離はもちろん私よりも遥かに沖に届いている。若い〔佐助〕が竿を豪快に振り込んだ。距離は〔武蔵〕よりも遥かに遠くに飛んだだろう。しかし、少し方向がずれて〔武蔵〕の道糸と重なった。新しく取り換えた竿先なのでブレが生じたらしい。だが、それは、〔武蔵〕の竿二本分40cmの間に入った程度だった。〔佐助〕が〔武蔵〕の立てかけた竿を20cmほど左の溝にずらして、その真ん中に竿を置いた。

その異様な雰囲気気圧されて、私は出していた竿を全て引き上げた。そして、彼らから遠く離れた丸太に移動した。私が移動している最中に、〔武蔵〕が私に声を掛けた。「あんたの竿を動かすかもしれないが、それさえ平気ならばここで釣りをしているも構わないのだよ。」と。私は、私のボロ竿を動かされるくらい全く平気なのだ。しかし、私の方が一投ごとに他人の竿を動かすことになるだろう。何よりここで釣りを続けるのは誠に居心地が悪くなるだろう。他人の竿を動かす度に平身低頭するのが嫌なのだ。



外れの丸太で一人離れて竿を出す

五時ころより、くの字岸壁でお祭り騒ぎが勃発した。どれも35cmを超えるクロガシラである。〔武蔵〕は40cm～50cmのモノを五、六枚あげたようだった。それに引き替え私

の竿はピクリともしない。

そのお祭り騒ぎが一段落したころ、町道場の剣術指南役のような風貌の釣り人が私のところにやってきた。私が投げている道糸の方向を見てこの向きでよいと教えてくれた。距離は70m程で、今年になってからもクロガシラが何枚も出ているとのことだ。昨日から釣り場を確保し、その釣り場をあっさりと明け渡した私に気を使ってのこのように思える。

私は、ツワモノ集団に負けないようにと懸命に振っていた竿を引き上げて、70m付近に力を調整して振り込んだ。そして、万が一のためにとタモをテトラに立てかけておいた。間もなく竿先がフワッと動いたような気配がある。しかし、その気配が続くようなことはなく竿先は微動だにしない。それから十分ほどしてから竿先がピクン、ピクンと動いて真っ直ぐになった。糸ふけも少し出たような気がする。竿を手に持ち、地元の人がテトラの上に設置したコンパネのステージに出ていきながらゆっくりと道糸を張っていった。竿先がグックとお辞儀をした。思いっきり合わせを入れてリールを巻いた。魚に乗った。クロガシラ独特の海底目指して刺さりこむ引きだ。ググッと仕掛けが海藻に絡まるような感じがした。ツワモノ軍団の中から「途中に根があるから休まないでリールを巻き続けろ」とガラガラとした野太い声がした。[武蔵] だった。オンボロリールを懸命に巻き続けていると魚が浮いた。座布団ではないが間違いなくクロガシラだ。テトラの周辺には海藻がびっしりと漂っている。魚を一気に抜きあげようとしたが、腰が弱くなったボロ竿のため、最後の一煽りに失敗して、テトラ前で仕掛けを魚と共に落としてしまった。魚はテトラの陰で見えない。軍団の中から四、五人が駆け寄ってきた。そのうちの[佐助] がテトラをピョピョンと飛んで私のタモを掴み一番前のテトラに下りて行った。そろりと道糸を掴みどうやらタモに収めたようだ。

[佐助] がクロガシラの収まったタモを私に差し出したのを見て、安心したのか軍団は引き上げていった。ツワモノ軍団は自分たちばかりではなく、この釣り場を利用する他の釣り人にも気を使っていたらしい。私はクロガシラを釣った時点でこの軍団の一員になれたような気がした。





無事タモに収まった

鋭い眼光で竿先を見つめていた釣り人達も、お天道様が高い位置に昇ってくるようになると、やわらかな眼差しになりあちらこちらで固まって雑談を始めた。そして、その輪から離れた〔指南役〕が塗料を削ぎ落とすような金籠かなべらを持って、私の前のテトラを下りて行った。続いて、〔佐助〕がピヨン、ピヨンとテトラとテトラの頂を飛びながら下りて行った。手にはやはり金籠を握っている。そしてテトラの下に潜り込んでその金籠を海中に差し込んだ。そこから引っ張り上げたのはエラコの房だった。その二つの塊を〔指南役〕に渡した。〔指南役〕はそれを私のところに持ってきて、「塩を持ってきているか」と聞いた。塩イソメ、塩エラコは持ってきているが塩そのものは持ってきていないと頓珍漢なことを答えると、残念そうに自分たちの陣地に持って行った。〔佐助〕はテトラの縁を渡りながらいくつものエラコの房を取ってからやはり自陣に戻って行った。塩をごっそりと積み上げた新聞紙を広げて待っていた仲間が、その中にプックリしたエラコの剥き身を次々と投げ入れた。日が高くなるとクロガシラはイソメには見向きもしないでエラコに来るのだという。そして、このエラコはみんなで使い回しするのだそうだ。

私も持ってきた市販の塩エラコを付けてはみたものの、アタリは全くといって出ない。今日はもうこんなところか。道具をたたんで引き上げることにした。帰り際に、〔佐助〕がどうも私の顔に見覚えがあったらしい。よくよく聞くと「北海道釣名人会」に所属していたが仕事の関係で参加し続けることが出来なくなり、退会したとのことだ。我が岩見沢釣遊会に何度も乗っていただいている〔小次郎〕の弟子として釣りを教わっていたともいう。その名前を伺い自宅に戻ってか「北海道釣名人会」のホームページを開いてみると、大会優勝の経験もある〔サンタマリア〕の枕詞がついた名前だった。是非、〔武蔵〕と〔小次郎〕

の対決を拝みたいものだ。

自宅に戻り後片付けをほぼ終えて玄関でホタル族をやっていると、家の中から「ギャーッ」という女房の断末魔のような悲鳴が響いてきた。どうしたのかと慌てて家の中に入っていくと女房が青い顔をして叫び続けている。「何かいる。台所からバサバサと物音がする。」というのだ。それは、ポリエステル製のレジ袋に入れたクロガシラだった。海中のフラスコから出して、三時間ばかりたったものだったが、生きていたのだ。そのとびっきり生きがよく女房に大声を上げさせた主も、夕食時には無事刺身となって女房の口の中に収まった。



女房に悲鳴を上げさせたクロガシラ